

感話

A.Y.

到達するのはずっと先のことだと思っていた十代後半に突入して、早くも十代も終わりに近づいています。以前よりますます時間の流れが速く感じられ、もうすぐ自分が二十歳を迎え、大人と呼ばれるようになるのまでそう時間がないことを実感するようになりました。今に至るまでを振り返ると私はただ何となく時を過ごしてきたわけでもなかったことに気が付きました。一番変化したのは私の視野だと思います。私の認識できた世界は家族から始まり、同世代のコミュニティー、学校へと広がり今では社会の一員であることを自覚するようになりました。そのように考えると、私はすでに社会人なのかもしれないとも思います。今回の感話では社会の一員として私が関心を持つメディアのことについて述べようと思います。

私がメディアに関心を持つようになったのは中学3年生の時に国語や情報の授業でメディア・リテラシーを習ったときからです。メディアからの情報を鵜呑みにしてはいけないというのは、TVとインターネットが全てを教えてくれると思っていた私には衝撃的な教訓であり、その後はできるだけ情報をクリティカルに受け止めようと努めるようになりました。また、メディア・リテラシーについては与えられた情報を批判的に受け止めるだけでなく、自主的な判断を加え活用する力も要求されています。そこで私はメディアからの情報に対して何らかの自分の意見を持つ努力もしてみました。ちょうどそのころ、東日本大震災が起こりました。世の中に情報があふれて変化し、何が真実で日本がどのような状態にあるのかが、想像もできない中自分の意見を持つ難しさに気が付きました。また、何とか自分なりに結論を出した意見は本当に自分の考えなのか疑問に思ってしまう。なぜならば、新聞、本、インターネット、TVの中で紹介されるもっともらしい意見が私の思考を中断させているからです。特にテレビでは様々な番組で社会問題が紹介され自分でその情報を処理する前に、専門家が力強く意見を述べ持論

を展開し始めます。画面の端に映されるその専門家の立派な肩書のせいでしょうか。彼らの意見に左右されることがしばしばあります。彼らの意見がいつの間にか私の意見に変化している気さえします。これは私が権威あるものに対して、批判の目を向ける能力が欠けていることを示しています。

情報があふれる社会で、私は何を信じていいのかわからなくなり、つい権威ある情報や意見に頼りたくなるのです。このように考えると自分の意見はメディアによって作られたものであるという側面を持っていることが私の場合確かです。ただメディアからの影響を全く受けない自分だけの確固たる意見を持つには世俗から離れ情報から隔離されたような辺境地で生きるという方法しかない、つまり不可能だと言わざるをえません。そのような中で、私たちが考えなくてはいけないのは、どのようにメディアと付き合い、情報を自分なりに吟味し、それにふりまわされないように努め、その上で自分の意見を発信していくかということだと思います。

メディアと向き合う際に考えなくてはいけないのは、メディアの圧倒的な力です。例えばそれは、大衆社会の流行や文化を左右します。未曾有の災害であった東日本大震災の後、3月という浮かれやすい月にもかかわらず、被災していない私たちが娯楽を自粛したり『がんばろう。日本』という標語のようなものが繰り返し流され日本全体に絆を大切にといったような雰囲気が出た背景にはまぎれもなくメディアの力が存在します。またスポーツの世界大会などが開かれ日本人選手が活躍すれば、新聞やテレビニュースではどんなに深刻な政治や社会の問題があってもそれらはすっかり影を薄くし選手の活躍ばかりが大きく取り上げられて、私たちが一丸となって選手の活躍を応援するという次第です。そのことが決して悪いことだとは思いませんが、危険だということを忘れてはいけません。つまりメディアは私たちの感情をコントロールして、特定の方向に向かわせる力を持っているということです。戦前の日本でも愛国心が鼓舞されて戦争に向かうことを正義とし、それに反発する意見は、

徹底的に弾圧されました。負け戦も、堂々と勝利したと報道されていきました。このような危険性がどうして二度と起こらないと断言できるのでしょうか。実際に今でも少なからぬ国で、権力がメディアをコントロールしています。戦争などの分野に限定しなければ何らかの分野において既に私たちも洗脳されているのかもしれない。洗脳だなんて大げさだと思われるかもしれませんが日本が過去に犯した過ちを繰り返さないためにも注意してしすぎることはありません。それほど大きな誤ちであったということを、当の日本人が忘れかけている気がします。というのは最近報道されるようになった日本人によるヘイトスピーチ運動においても、その運動が日本では合法であることに国際人権委員会で強い懸念がしめされたそうですが、日本人の外国人を排斥し自己を愛する精神、つまり愛国心はいまだに国際社会で警戒されているということを表していると思います。やはり私たちは平和とは逆の方向に向かった力を見抜き警戒しなくてはならず、特に大きな影響力を持つメディアに注意しなくてはならないと思います。

しかしどのようにメディアとその背後にあるだろう権力に抵抗すればよいのでしょうか。その方法の一つとしてもうすぐ参加できる選挙があると思います。私の一票なんて、と思う人もいると思いますが一票を投じるために足を運ぶことは、大きな意味を持つと思います。それがたとえ白紙であってもその一票は無駄ではないと思います。私たちは社会に関心があるということ、私たちに意見を発する力があるということ伝えることができると思います。しかし最近では投票率、特に若者の投票率がかなり低いといわれています。投票用紙に価値がないと多くの方が考えるからでしょうか。私たちがこうして二十歳になれば投票に行けるのは過去の人々の計り知れない努力によるものです。投票権のない社会がどれほど生きにくい社会であることを歴史が教えてくれます。しかしそのことを私たちは忘れがちです。投票権が制限されれば、投票用紙の大切さに気付くのでしょうか。それでは遅すぎると思います。私たちのこのよ

うな態度がますます私たちの発言力を弱め、相対的に強まる権力があるということを忘れてはいけません。

このように私の未熟な目でも世の中の多くの問題を発見することができます。しかし世の中の様々な問題に対してどの主張が正しく、どの主張が間違っているのかそれを判断する力が乏しいと痛感しています。そのように考えていく中で私は社会の一員として、少しでも世の中が良い方向に向かうことを願い、その手がかりを見つけるために社会学を学びたいと思うようになりました。社会学は社会の様々な問題を取り扱いますが、その学問を通じて考察を深め多面的に社会を見ていく視点を養い問題を解決する方法を自分の頭で考えられる人になりたいです。その中でも私は、一番興味を持っているメディアについて専門的に学んでみようと思っています。ただ学問をしたからと言って、年を重ねいろいろな体験を積み重ねたからと言って、立派になるわけでも優れて賢くなるわけでもありません。しかし二十歳になって選挙をはじめとする権利や自由が拡大すればするほど、今までのように世の中の不条理を無責任に批判することができなくなり一つ一つの発言に責任を問われることは明らかです。その時にしっかり対応できるようこれからの学びを生かしていきたいと思っています。そして将来批判的に社会を見て判断しようとする姿勢を忘れ、世の中の流れにただ流されるようなことがあれば、17歳の私が責任を持って自分の意見を言う社会人になる覚悟をこうして言葉に記したことを思い出したいです。